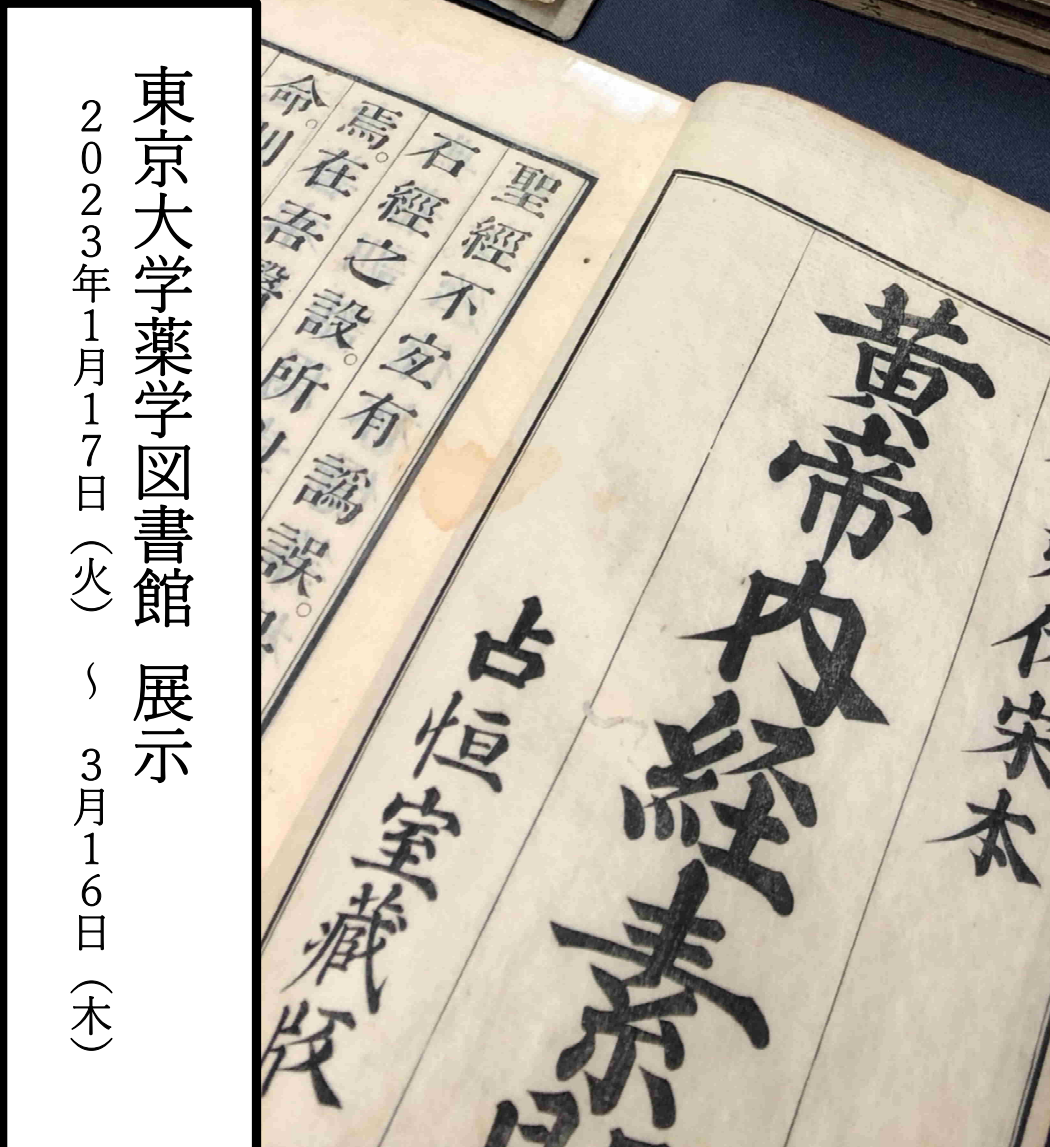




中国伝統医学に見る薬学

「黄帝内経素問」と「本草綱目」



東京大学薬学図書館 展示

2023年1月17日(火) ～ 3月16日(木)

■ 開催挨拶

東京大学薬学図書館は、1958年に薬学部が独立した学部となった時以来、学内外の薬学研究に携わる方々の教育と研究を支援するため、数多くの資料を収集してまいりました。また、日本薬史学会からのご寄贈をもとに設置された薬史学文庫には、日本の薬学研究史上、貴重な資料を多く所蔵しています。これらの資料を後世に伝え、薬学研究並びに薬学史研究のさらなる発展を願って、薬学図書館では資料展示を行っています。今回の展示はその第2回目となります。今後も様々な展示を実施していきたいと考えておりますので、皆様のご助力を賜りますよう、お願い申し上げます。

2023年1月

薬学部図書委員長 大和田 智彦

■ 展示概要

2021年、本学薬学系研究科天然物化学教室で長く保管されていた和装本50点が、薬学図書館に寄贈されました。そして今年度、公益財団法人田嶋記念大学図書館振興財団の助成を受け、修復と保存のための処置が施されました。これにより、貴重な資料が教育・研究に活用され、また後世に継承されるための環境が整いました。

今回はこの寄贈資料の中心を成す「こうていだいけいそもん黄帝内経素問」と「ほんぞうこうもく本草綱目」を紹介する展示を実施します。いずれも中国の伝統医学、薬学（本草学）を代表する文献として知られ、日本でも広く普及しました。今回の展示資料は江戸期の日本で刊行されたものと考えられます。

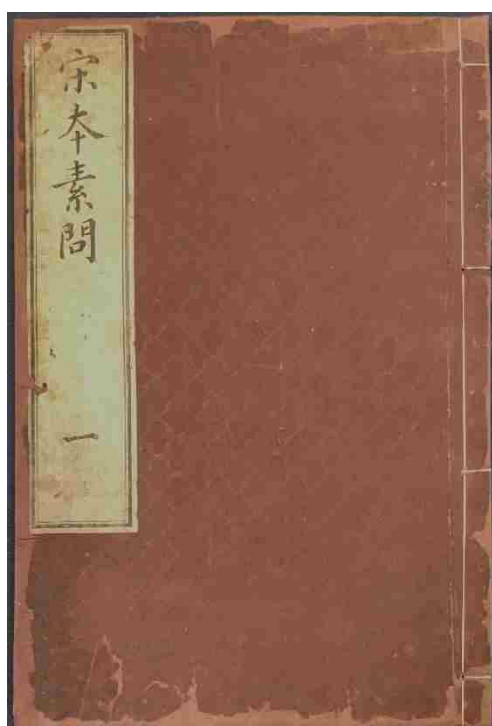
一般にはあまりなじみのない分野ですが、近代以降の西洋医学とは異なる考え方に基づく中国伝統医学は、現代の医学・薬学に新たな知見をもたらす可能性を秘めています。今回はその奥深い世界の一端をご紹介します。

I 「黄帝内经素問」

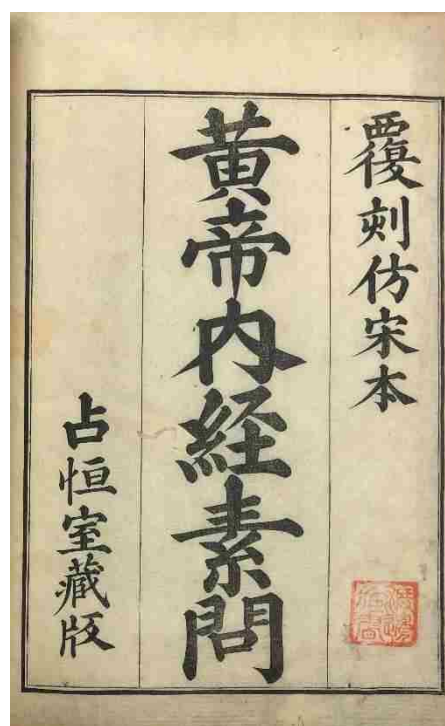
「黄帝内经」は、伝統的な中国医学の思想を代表する文献とされます。元の「黄帝内经」18巻は前1世紀ごろに成立し、その後、後漢時代（2-3世紀）までに「黄帝内经素問」9巻（以下「素問」）と「黄帝内经鍼経（のち靈枢）」9巻の2書に分かれたものと考えられています。現在伝わる「素問」は、唐の時代の王冰（8世紀ごろ）によって762年に章編を改められ再整理された「次注本」と呼ばれているものです。

篇第1から第74までは、伝説上の聖王である黄帝が、その臣で医学に通達した岐伯らに医学上の疑問を問う問答形式になっています。篇第75から第81までは、黄帝が臣下の雷公に医学を教える形の間答になっています。

診断にあたっては、望診（顔や皮膚の色を見る）や問診（患者の話聞く）などがありましたが、最も重視されたのが脈診です。また治療法は鍼が中心で、薬物療法への言及は少ないのが特徴です。



黄帝内经素問 表紙

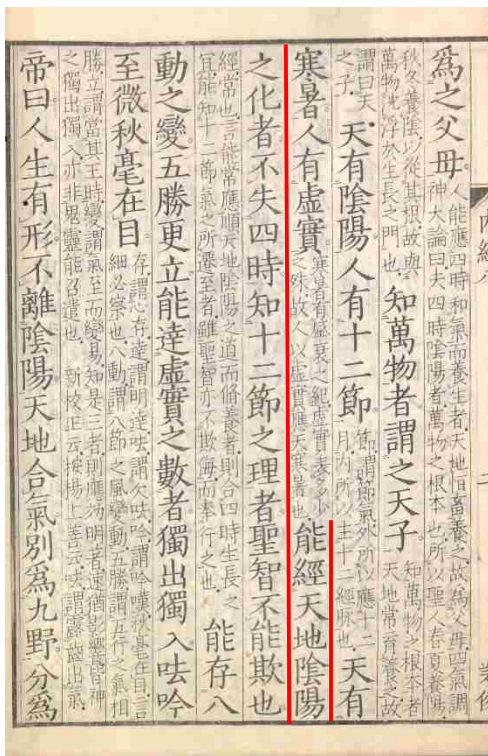


黄帝内经素問 封面（標題紙）

「素問」にみる中国医学の思想

人を含む万物（宇宙・自然）は「気」からできているとされます。「気」は基本的に流体の概念ですが、凝集して、身体のように形を成します。このような「気」によって成り立つ世界の生成・変化は、「陰陽」の原理によってもたらされます。「陰」と「陽」は相補的な概念で、一方が強まったり弱まったりすることで世界は変化するとされます。また万物を五つの構成要素からなると考える「五行」説も取り入れられて、人体の各器官を含むあらゆる事物がこの五つのカテゴリーに分類され、各要素間で相互的な関係が成り立っています。

このような世界観を理論的な根拠として、人の健康は、自然の変化（四季）に応じた適切な生活を送ることによってもたらされ、これに反した生活が病気をもたらすと考えられました。したがって病気の治療は、自然に適応し、心身のバランスを回復させることを目指して行われます。同じ病気でも、季節や風土が異なれば、違う治療法がとられることもありました。近代以降の西洋医学的な病因論とは異なり、心身は自然環境のうちにある統合的なシステムであるとする考え方に立っており、そのため治療よりも予防の重要性が説かれています。こうした考え方には、現代的な医学に通じる面があると言えるでしょう。



宝命全形論篇第二十五 「黄帝内經素問」第三卷

(傍線部和訳)

天地陰陽の変化を弁えてよく適応する人は、四時生長の事宜によくかない、十二節十二経脈の道理をよく理解する人は、いかなる害邪にも攪乱されることのない、聖智ともいべき存在であります。

「世界の名著 中国の科学」中央公論社
1975 p.390 より

II 「本草綱目」

「本草綱目」は中国の本草学を代表する書で、明の時代の1596年に刊刻が完了して朝廷に献上されました。作者の李時珍（1518～93）は、本書の著述に30年近くを費やしています。

本書では、薬効を基準としたそれまでの中国本草書の伝統的な薬品分類である三品分類を廃して、新たに16部の大分類（水部・火部・土部・金石部・草部・穀部・菜部・果部・木部・服器部・虫部・鱗部・介部・禽部・獸部・人部）と、その下に60類の小分類に整理分類して、本草書をより実用的なものに再編成しました。そのため刊行後にはこの書が大いに普及しました。

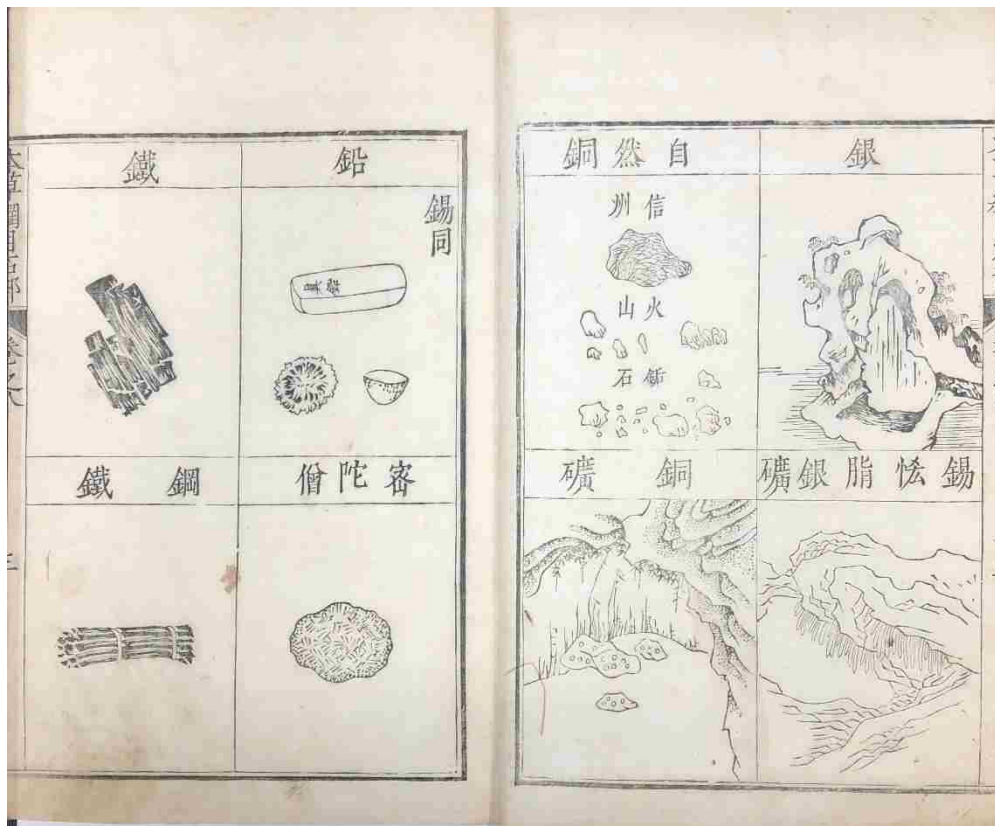
日本には遅くとも1604年には伝わっており、徳川家康に献上されています。江戸時代には日本でも多くの刊本が出され、林羅山、貝原益軒、稲生若水、小野蘭山らによる校訂・注釈等の研究が盛んに行われました。本展示資料は日本で刊行されたもので、あとがきに安政2（1855）年の記載があります。



「本草綱目」表紙



「本草綱目」封面（標題紙）



金石部 金類 附図

(右頁解説)

銀

精神を安定させる作用のほか、小児の発熱、丹毒等に効果があると記されている。(薬効は「本草綱目」の記述による。以下同)

錫恠脂^{しゃくりんし}

角銀鋳のこと(注)。角銀鋳は塩化銀からなる鋳物で、銀鋳床の酸化帯に二次鋳物として産出される。点眼でかすみ目に、内服で風邪、糖尿病に薬効があると記されている。

自然銅

黄鉄鋳または褐鉄鋳のこと(注)。黄鉄鋳は鉄の硫化鋳物で、褐鉄鋳は鉄の水酸化物を主成分とする鋳物。図中の「信州」や「火山」は産地名。骨折を癒す薬として、あるいは精神安定剤として用いる等と記されている。

銅鑛石

未精製の銅の鋳石。腫瘍・はれものに塗布すると記されている。

(左頁解説)

鉛

精神の安定、熱病、吐き気治療のほか、蛇やトカゲの咬み傷等に用いると記されている。

^{みつだそう}
密陀僧

一酸化鉛のこと。下痢、痔、切り傷のほか、驚いて失語状態になった時に服用する等と記されている。

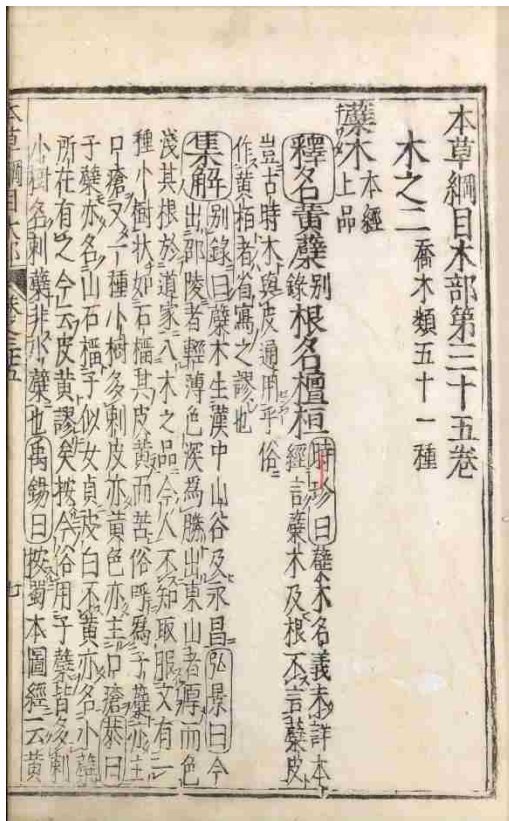
鐵 (鉄の旧字)

脱肛や高熱で耳が聞こえなくなった時などに用いると記されている。

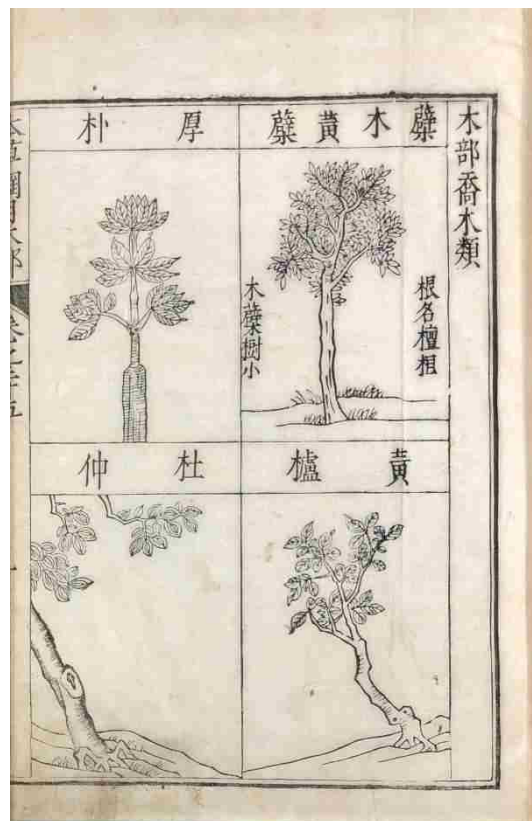
鋼鐵

鉄を焼き鍛えて硬くしたもの。切り傷、消化不良を治し、精神の安定、白髪染め等に用いると記されている。

注：鉉物の同定は「新註校定 国訳本草綱目」春陽堂 (1979) による。



木部 木之二 喬木類
檗木 (黄檗)

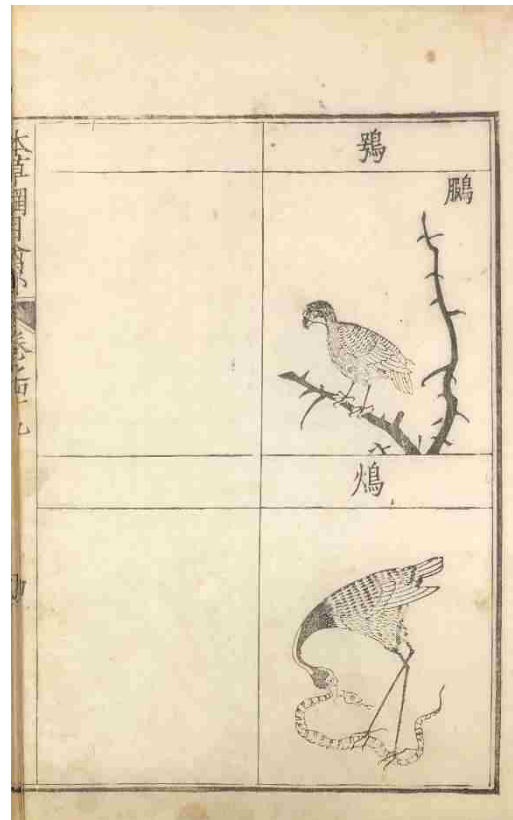


附図 「黄檗」部分 (右上)
「本草綱目」第 35 卷

おうばく
黄檗

和名はキハダ (キワダ)。下血、痔、手足のしびれ、閉尿等に用いると記されている。現代では、健胃・整腸薬として用いられている。

頭主治痘瘡里酒用三月者一二枚燒灰酒服之
 當起勝珍○出雲
 目主治吞之令人夜見鬼物藏器
 鳥音源去聲
 別錄下品
 釋名與運日同
 同力鳥景陶弘
 集解別錄白鴿生南海賦景白鴿與鴿日是兩種
 廣之深山中鴿日狀如黑槍雜作聲似云同力故
 江東人呼鴿為同力鳥並啖蛇人誤食其肉立死並
 瘵蛇毒昔人用鴿毛為毒酒故名鴿酒頃不復爾
 又海中有物赤色狀如龍名海蓋亦有大毒甚於
 鴿羽恭曰鴿鳥出南州以南江嶺間大有人皆謂
 識其肉腥有毒不堪啖云羽畫酒浸入亦是浪語



禽部 禽之四 山禽類 ^{ちん}鳩
 「本草綱目」第 49 卷

附図 「鳩」部分 (下)

^{ちん}鳩

南方に生息し、蛇を食べ、毒を持つとされる鳥。蛇に咬まれたところに塗れば毒を消すと記されている。

現在知られている鳥類に同定されるものはなく、空想上の鳥であると考えられてきたが、1992年にニューギニア島でピトファイという毒を持つ鳥が発見され、鳩に相当する鳥がかつて実在した可能性もあることが指摘されている (注)。

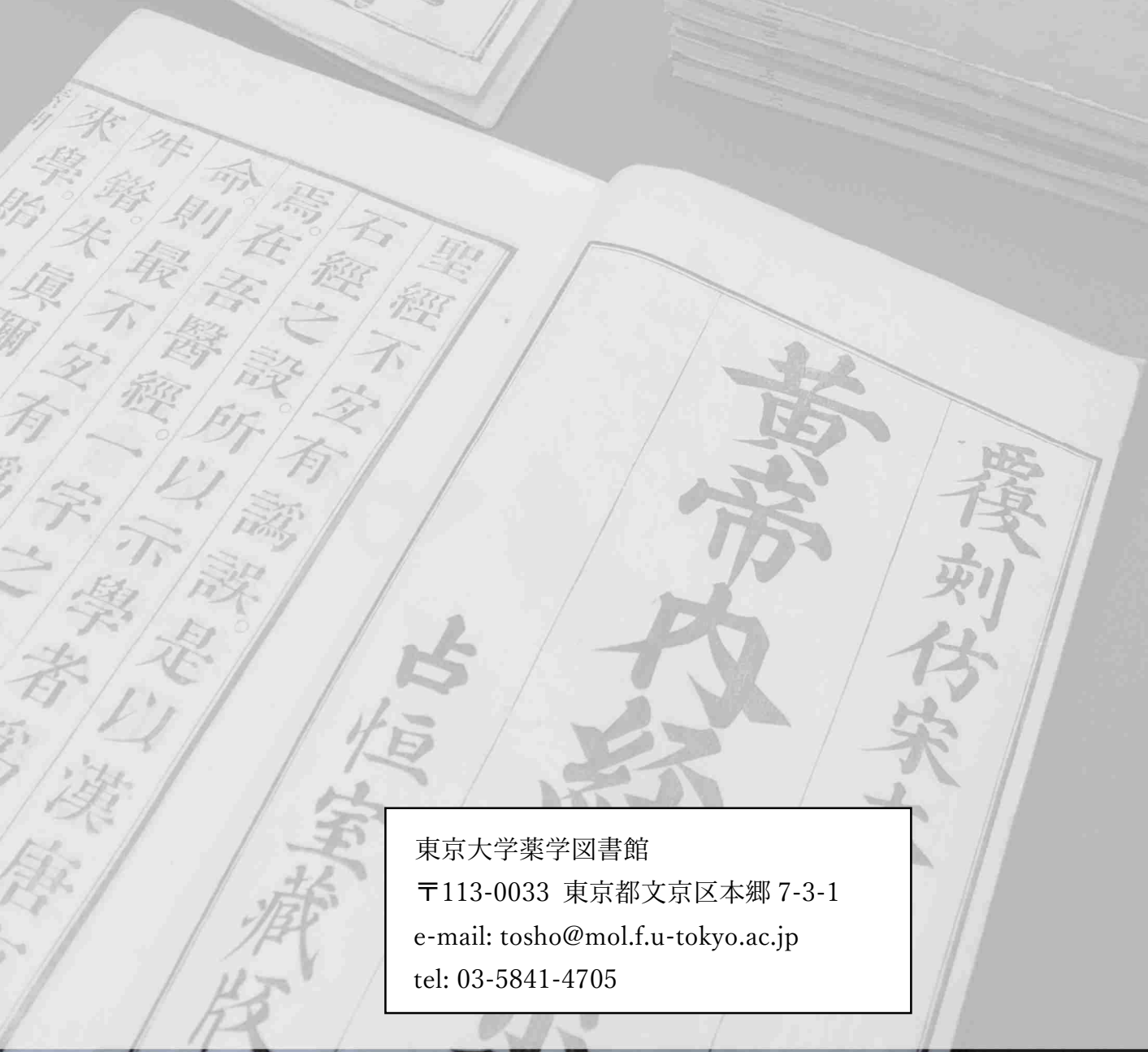
注：「新発見の毒鳥ニューギニアピトファイをめぐって」富士川龍郎，和泉堯己（「化学と生物」Vol.34, No.7 1996.7）

■ 展示協力

志茂 将太郎（東京大学大学院薬学系研究科 天然物化学教室）

■ 参考文献

- ・「中国医学はいかにつくりられたか」 山田慶兒著. 岩波新書, 1999
- ・「中国医学思想史：もう一つの医学」 石田秀実著. 東京大学出版会. 1992
- ・「本草書の研究」 渡邊幸三著. 杏雨書屋編. 武田科学振興財団. 1987
- ・「新註校定 国訳本草綱目」 鈴木真海訳. 白井光太郎校注. 春陽堂書店. 1979
- ・「世界の名著 中国の科学」 藪内清責任編集. 中央公論社. 1975
- ・「新発見の毒鳥ニューギニアピトフイをめぐって」 富士川龍郎, 和泉堯己. (「化学と生物」 Vol.34, No.7 1996.7)



東京大学薬学図書館
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
e-mail: tosho@mol.f.u-tokyo.ac.jp
tel: 03-5841-4705